

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13050

研究課題名（和文）戦後保育の「教育の現代化」を契機とする知的教育の総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study of intellectual education influenced by post-Sputnik curriculum reforms in postwar early childhood education

研究代表者

福元 真由美（Fukumoto, Mayumi）

青山学院大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：00334459

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1960-1970年代の日本の幼児教育における知的側面の発達を重視した教育について、「教育の現代化」との関連を明らかにすることを試みた。そこで、数、科学、言葉の3つの分野について基礎的資料を収集し、当時の幼稚園教育の動向や特徴的な事例を中心に検討した。結果、「教育の現代化」の影響を受けた知育の特徴として、3分野において認知の発達を目的とする「遊び」が、教育方法として重視されたことが明らかになった。その歴史的経緯、具体的な「遊び」の内容と方法、幼小接続へのつながりについても検討し、国内の学会で報告し、論文化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後幼児教育史研究における知的教育に関する議論は、経験主義対系統主義、情操重視対知識重視の構図で解釈する問題を有し、1960-1970年代の多様な知的教育の可能性を追究することを難しくした。このため、当時の数的、科学的、言語的な経験を組織する保育の理論及び実践に関する研究の空洞化を招いた。これに対し本研究は、戦後の知的教育の展開を「教育の現代化」と関連づけ、それらを考察する研究の端緒を開いた。そして「教育の現代化」を契機に、日本の幼小接続に関わる知的教育の系統が成立した可能性を描き出すことを試みた。

研究成果の概要（英文）：The study aims to describe the characteristics of preschool intellectual education in Japan in the 1960-1970s in relation to the curriculum reforms of the post-Sputnik era. In this study, basic data in the three areas of mathematics, science, and language were collected and examined, focusing on curriculum guidelines for preschool education at the time and distinctive examples of intellectual education. As a result, it became clear that "play" for the purpose of cognitive development was emphasized as an educational method as a characteristic of intellectual education influenced by the post-Sputnik era curriculum reforms. The historical background, specific contents and methods of early childhood education emphasizing "play" and its relationship to the connection between preschool education and elementary school education were also discussed.

研究分野：保育学、幼児教育学

キーワード：教育の現代化 知的教育（知育） 就学前教育 数遊び 科学遊び 言葉遊び

1. 研究開始当初の背景

戦後の幼児期の知的教育に関する研究は、言語領域の事例を中心に、その理論的、実践的試みを、経験主義対系統主義、情操重視対知識重視の構図で解釈する問題を持ち、この時期の多様な知的教育の可能性を追究する関心は希薄だった。この構図において、1960-70年代の「教育の現代化」に触発された幼児の知的教育は、1989年の遊びを重視する幼稚園教育要領の告示を契機に、系統主義、知識詰め込み型と評され、その成果や今日的な保育との関連は学術的関心の周辺に置かれた。このため、当時興隆した数的、科学的な経験を組織する保育の理論及び実践研究の空洞化を招いた。

一方、日本における保育カリキュラムの改革に関するアプローチの基盤や経緯について、十分な歴史的検討が行われていない現状があった。先進諸国の保育改革のアプローチは、「就学準備型」(仏・英・米)、「生活基盤(ホリスティック)型」(北欧・独)の2つの型があると指摘される(OECD, 2006)。日本の保育改革は上記の2つの型におさまらず(泉他, 2008)特に幼小の知的教育の連続性においては、戦後の多様な保育理論、実践が内包され、その特質を把握することが難しい。そこで、戦後の知的教育の研究、理論、実践の系統を整理し、それらの成果と課題が、今日の幼小接続の教育にどのように引き継がれたか解明することが求められた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後日本の保育における「教育の現代化」の受容の過程を叙述し、その受容を通して成立した知的教育の理論、実践、担い手の特徴等を明らかにすることである。これにより、1960-70年代の保育カリキュラム改革を牽引した知的教育の系統の特質を描出し、その成立、展開の意味と課題を考察する。知的教育の分野では、幼児を対象に顕著にみられた数、科学、言葉の3分野を取り上げる。知的教育と保育カリキュラムの関係を問う本研究は、当時の幼児教育と小学校教育の関連、後の接続の問題を包摂し、幼小接続の歴史的経緯を具体的に解明する作業の一つに位置づけられる。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するため、次の2つの課題を設定した。

【課題1】戦後保育における「教育の現代化」受容の様相を明らかにする。

課題1では、「教育の現代化」をテーマにした教育関係図書(大阪府私立幼稚園連盟『幼児教育の現代化』[1971]、教育現代化研究会『教育実践の現代化』[1970]等)および当時の主要な保育・教育雑誌『保育』『教育』『現代教育科学』等の記事の内容を分析し、「教育の現代化」が保育・教育関係者にどう理解され、保育の課題が議論されたかを考察した。また、「教育の現代化」を背景に保育の現場でどのような実践、研究が行われ、それらが幼児教育と小学校教育の連関を図る取り組みにいかに関わりつづいたかを、東京学芸大学附属竹早小学校・幼稚園を事例に検討した。

【課題2】「教育の現代化」の影響を受けた知的教育の成立の経緯、理論、実践、担い手の特徴を明らかにする。

課題2では知的教育を数、科学、言葉の3分野で捉えた。各分野の先行研究の知見、保育内容の位置づけに関わる経緯、1960-70年代当時の理論と実践の展開過程は、それぞれ異なる。このため、分野ごとの状況を踏まえ、知的教育の特徴的な側面を表す部分について重点的に分析することを試みた。数の分野では、知的教育の成立を準備した幼稚園教育の歴史的経緯、科学の分野では、教材やカリキュラムの開発と実践、言葉の分野では、教育方法と内容の変化と理論、である。主な史資料として、幼稚園教育のカリキュラム・ガイドラインに関して『幼稚園教育要領』(1957, 1964)、『幼稚園教育指導書』(1960-62)、『幼稚園教育指導書〔領域名〕指導の実践』(1961-63)教育現場における保育内容、指導法に関しては、保育雑誌『幼児と保育』(小学館)、『保育カリキュラム』(ひかりのくに)、『保育の友』(全国社会福祉協議会)等の記事を調査、収集した。

4. 研究成果

【課題1】戦後保育における「教育の現代化」受容の様相

課題1に関しては第一に、科学技術の急速に発展する社会の変化への対応という教育課題のもと、初等・中等教育と同様に保育でも「教育の現代化」が受容され、特に保育の方法と内容に関して次の4点の問題が提起されたことを示した。それは、(1)幼稚園教育の方法・内容としての「遊び」理論の欠如、(2)「ゆたかな環境を備える」だけでなく、「周到に準備された刺激的環境」を整える必要、(3)幼児の発達や保育における自然主義の克服、(4)5歳児就学の問題からの

「幼小連関」の特質、である。これらの問題が、課題2で検討した知的教育の開発、普及の過程で取り組まれた点についても指摘し、「教育の現代化」が知的教育の進展を促したことを示唆した。研究成果は、日本保育学会第71回大会ポスター発表「保育における『教育の現代化』論の様相」(2019)で報告した。

第二に、東京学芸大学附属竹早小学校・幼稚園を事例に、「教育の現代化」の影響を受けた実践研究が、幼小連関研究の一環として実施された点をとらえた。1960年代にみられた子どもの発達加速化現象や幼年教育の議論を背景に、竹早幼小は1962年から「幼・小教育の連関(アーティキュレーション)」(三浦, 1963)を検討する研究を開始、「社会的適応」「言語」「数量」「社会・自然に対する認識」「体育的遊び」の5部会で4歳児から2年生の発達、学習に関する実態調査や実験を行った。この成果をもとに、1970年度の研究では「幼稚園教育の現代化」を踏まえた数・量概念の指導が検討され、小学校の算数への対応が図られたことを明らかにした。さらに後の竹早幼小の研究が「幼・小・中の連携カリキュラム」の構想、提案に発展する過程を検討し、その成果を著書「東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎・竹早小学校における幼小接続のカリキュラム開発:1990年代-2010年代前半の幼小一貫から幼小中連携への移行」(太田素子・小玉亮子・福元真由美・浅井幸子・大西公恵『幼児教育資料アーカイブ3 幼小接続資料集成 解説』, 不二出版, 2022)で発表した。

【課題2】「教育の現代化」の影響を受けた知的教育の特徴

課題2に関しては第一に、数の分野において、明治初期から昭和中期までの幼稚園教育の内容と方法を概観し、「幼稚園教育要領」(1956)における数の教育の特徴とカリキュラム上の位置づけを明らかにした。これにより、数に関する教育実践および研究の活発化した1960年代半ば以前に、どのような数の教育の状況が幼稚園教育において準備されたかを捉えた。大正期以降、数に関する教育方法の模範として、環境を通して数への関心を高め、認識を感覚的に促す方法、遊びとして数に関わる活動を組織する方法の2つが示された。1956年、数に関する保育内容が国のカリキュラム指針に盛り込まれた際、この2つの方法は、望ましい指導法として文部省の指導書で取り上げられた。数に関する内容は、領域「自然」「言語」「絵画製作」の3領域に分散して配置され、数そのものの直接の指導を避ける配慮から、領域によっては数の教育の位置づけがゆるいでいた。幼稚園教育では、数の教育は環境、遊び、領域の活動に埋め込まれ、それ自体の教育としては見えないように指導することが求められた。こうした数の教育の状況が、1960年代以降の「教育の現代化」に即した「数遊び」研究の背景にあったことがわかった。研究成果は、青山学院大学『教職研究』第9号掲載の論文「明治初期から昭和中期の幼稚園における数の教育」(2022)で発表した。

第二に科学の分野では、保育雑誌『幼児と保育』の「科学遊び」に着目し、「科学遊び」がどのように「現代化」の動向を反映させたかを検討し、「科学遊び」の特徴とその意味を考察した。まず、戦後の科学技術教育の国策化にともない、幼稚園教育でも科学技術の発展に応じた教育の必要が唱えられ、幼児の「科学性の芽ばえ」が重視された点、および理科教育の現代化を背景に、将来の「科学の方法」習得の基礎となる幼児の自然に対するかかわり方、考え方に重点がおかれた点を明らかにした。次に、永野重史(国立教育研究所)の記事に注目することで、『幼児と保育』の「科学遊び」が、自然科学分野の「教育の現代化」を反映させて成立したことを示し、「科学遊び」の特徴として以下の4点を抽出した。すなわち、アメリカの科学教育カリキュラムを参考に、さまざまな実験的活動を組織した点、将来的な正しい自然認識の形成を志向し、自然の法則の直観的な把握が目指された点、季節ごとの保育に対応して構想され、主題や活動の範囲が広がられた点、保育者の問いかけによる話し合いよりも、子どもが自分の考えを検証する活動に重点がおかれた点、である。

研究成果は、日本保育学会第72回大会ポスター発表「『教育の現代化』を通じた保育における「科学遊び」の登場とその意味:雑誌『幼児と保育』の検討を中心に」(2019)、幼児教育史学会第18回大会シンポジウム幼児教育史研究の成果と課題2-幼児教育の現代史にむけて-「科学と交錯する幼児教育」(2022)を含む国内学会で計5回報告した。また、幼児教育史学会監修、小玉亮子・一見真理子編『幼児教育史研究の新地平』下巻(萌文書林)所収の論文「『教育の現代化』における『科学遊び』の特徴と意味-1960~70年代の雑誌『幼児と保育』に掲載された記事の検討を中心に-」(2022)で発表した。

第三に言葉の分野では、保育雑誌でみられた「ことば遊び」の変化に注目し、その変化の特徴を村田昭三(国立教育研究所)、須田清(明星学園初等部)の議論を手がかりに検討した。1960年代前半までの「ことば遊び」は、しりとり、なぞなぞ、かるたの伝承的なもの、歌曲に合わせて言葉をくり返すもの、物の一部から名前を当てるもの等が中心だった。60年代半ばより、「ことば遊び」は、伝承的な遊び方を楽しむよりも、「知育」や「認識の発達」の文脈で語られるようになり、編成面では系統性が求められ、内容面では音声法(音節法)の活動が導入されたことを示した。「ことば遊び」の系統性に関しては村石の教育論を分析し、村石が幼稚園・保育所と小学校のそれぞれの言葉・文字学習をつなぐものとして、「ことば遊び」を捉えたことを明らかにした。音声法に関しては須田の議論を検討し、須田が音声法の教科書『にっぽんご-もじのほん』(1964)の前半部分の学習を幼児教育に期待していたことを指摘した。研究成果は、日本保育学会第73回大会ポスター発表「1960年代の保育における言葉の教育-「ことば遊び」を中心に-」(2020)で報告した。

引用文献

- 泉千勢・一見真理子・汐見稔幸, 2008, 『世界の幼児教育・保育改革と学力』, 明石書店.
- 三浦義雄, 1963, 「第1章 幼・小教育の関連と問題点」東京学芸大学教育研究所年報編集委員会 『幼・小教育の関連 - 五つの問題点とその解決試案 - 』学芸図書, 9.
- OECD, 2006, *Starting Strong : Early Childhood Education and Care*, OECD.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 福元真由美	4. 巻 9
2. 論文標題 明治初期から昭和中期の幼稚園における数の教育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青山学院大学 教職研究	6. 最初と最後の頁 77-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長江侑紀・鈴木康弘・若林陽子・森田怜・戸高南帆・彦坂春森・福元真由美	4. 巻 70
2. 論文標題 近現代日本の保育史研究の動向と課題：2007年～2017年の研究を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 73-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 福元真由美
2. 発表標題 1960-1970年代初頭における「科学遊び」の諸相 - 雑誌『幼児と保育』のカリキュラム案を中心に-
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第6回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福元 真由美
2. 発表標題 1960年代の保育における言葉の教育 - 「ことば遊び」を中心に-
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福元 真由美
2. 発表標題 1960~1970年代の領域「自然」における保育者の専門性：「教育の現代化」との関連から
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第5回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福元真由美
2. 発表標題 「教育の現代化」を通じた保育における「科学遊び」の登場とその意味：雑誌『幼児と保育』の検討を中心に
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福元真由美
2. 発表標題 1960～70年代の保育における「科学遊び」の方法と内容
3. 学会等名 日本教育学会第78回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福元真由美
2. 発表標題 保育における「教育の現代化」論の様相
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 太田素子・小玉亮子・福元真由美・浅井幸子・大西公恵	4. 発行年 2022年
2. 出版社 不二出版	5. 総ページ数 118
3. 書名 幼児教育資料アーカイブ3 幼小接続資料集成 解説	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------